

川辺市子（月子）	・ ・ ・ 大浦千佳	1987年生まれ。	無戸籍。月子の姉。
川辺月子	・ ・ ・ ・ ・ （不在）	1990年生まれ。	市子の妹。デュシェンヌ型筋ジストロフィー患者。1歳で発症。17歳の時に市子に殺害される。
川辺なつみ	・ ・ ・ ・ ・ 田山由起	1966年生まれ。	月子と市子の母。
山本さつき	・ ・ ・ ・ ・ 池田萌子	1987年生まれ。	市子の幼少期の友人。
室賀梢	・ ・ ・ ・ ・ 朝見心	1990年生まれ。	市子の小・中時代の親友。
田中宗介	・ ・ ・ ・ ・ 坂城君	1990年生まれ。	市子の高校時代の友人。市子の初めての彼氏。
北秀和	・ ・ ・ ・ ・ アベラヒデノブ	1990年生まれ。	市子の高校時代の同級生。市子のストーカー。
小泉正雄	・ ・ ・ ・ ・ 野川慧	1974年生まれ。	ソーシャルワーカー。市子を強姦しようとして市子に殺害される。
吉田キキ	・ ・ ・ ・ ・ 久保陽香	1988年生まれ。	パティシエを目指す市子の寮友達。
後藤	・ ・ ・ ・ ・ 中台あきお	1971年生まれ。	ある事件を追う警察官。
長谷川	・ ・ ・ ・ ・ 田谷野亮	1983年生まれ。	市子の最後の恋人。
			川辺市子と同姓同名の川辺市子と婚約していた。

舞台は、二面観客席の素舞台。

観客席ではない二面には椅子（ボックス）が並べられていて、舞台の中央は段差がつけられたフリースペースがある。

場所は会話の最中に様々な空間へと、自由に変化していく。

基本的にキャストは全員壁に備え付けられた椅子（ボックス）に座っている。

川辺市子と出会った、もしくは関わった人間が次々と現れ、当時の印象を語りと再現を中心に構成される。

1987年、川辺市子が生まれ、2015年の失踪までのお話。

時間軸は自由に変化するが、基本的には2015年の市子失踪後のお話である。

## 1 川辺市子について

映像 2015年 8月 市子28歳 月子死亡

夏。

強い日差しの中、クマゼミの強い鳴き声が辺りに響く。

役者が順番に劇場入り口から登場し、段差のあるステージの周りを歩き、踏切を超えるように歩き、壁際の椅子に座る。電車を待つように、それぞれ携帯をいじったりしている。

近鉄電車の踏切の音が聞こえてくる。

全員がゆっくりりと手を空にかざし、一気に振り下ろす。

その瞬間、勢い良く電車が通過し、暗転。

蝉の鳴き声は止み昼から夜へと変化を遂げ、溶明すると川辺市子が立っている。

市子「欲しいのは穏やかな暮らしで、ただただ、小さい頃みたいな穏やかな暮らしで。うちが小さい頃に住んでた団地は、ちよつと離れた一軒家の人から穏やかちやうって思われてたみたいやけど、確かに、うちだって、今考えたら穏やかな暮らしをしたとは思えへんけど、でもそれでも、やっぱりうちにとっては、あん時の生活は穏やかやって…。まだ月子と一緒に：遊んだり、近所のさつきちゃん、泥団子作ったり砂山作ったり、飽きもしんと作ってたなあ…。暗くなったらさつきちゃん、ささっと帰ってしもて、団地やから、色んな窓には明かりがついてて、ついてて…。うちと月子は手つないで、その明かり暫くボーッと見るのが好きやった…。（夕食の匂いを感じ取り）好きやった…。」

市子が話をしている間に、男（長谷川）が卓袱台を台拭きで拭いている。食卓の準備だ。

長谷川「こないだ、SNSで小さい女の子が半月前から行方不明になってるって情報がある、僕の遠い知り合いがシェアしてて、その居なくなった場所が僕の昔住んでた場所に近くて、なんか嫌な気分になったわ。その子の写真も掲載されてて、その写真がなんかモデル風で。タレント気分なんか言うのが、妙にこっけいで、家族もなんでこんな写真を選んだんやろって思ってたし、どんな状況でも人に良く見られた

いつて願望が人間にはあるんかなあ…とかいろいろ。SNSやから、その人のページ見てたら友達といるときのアホみたいな写真とか出てきて、なんかこの後、娘が居なくなるって考えたら情けなくて…人生を年表にしたら、やっぱ滑稽なものなんかなあとか。…僕にも實際行方不明になってしまった恋人が居るから、めっちゃ深刻に見つかって欲しいなあって願ってはいるんです」

長谷川が話をしている間に、市子はビーフシチューを作っている。

市子「シチュー、ええ感じや」

長谷川「肉、めっちゃ入れてな」

市子「今日はそんなに肉入ってへんねん。ごめんな」

長谷川「なんで？」

市子「給料日前やねんから」

長谷川「それ。便利な言葉やなあ。給料日前」

市子「事実。苦しいの」

長谷川「(シチューを見て)お。うまそう」

市子「長谷川くん、小さいときは何が好きやった？」

長谷川「肉やなあ」

市子「もう、焼肉とかすき焼きとかあるやん」

長谷川「牛肉やったらなんでも」

市子「男の人ってそういうところある」

長谷川「市子は？」

市子「うちは、味噌汁かな」

長谷川「え」

市子「変？」

長谷川「嫌いな人おらんとは思うけど」

市子「夕方になつたら匂いするやん」

長谷川「ああ」

市子「どこかの家の」

長谷川「する」

市子「幸せそうな匂い」

長谷川「ははは」

市子「懂れの匂い」

長谷川「…うん」

市子「(シチューを食べる)」

長谷川「(シチューを食べる)」

市子「(笑って)やから」

長谷川「やから？」

市子「うち、今幸せなんよ」

長谷川「…」

市子「…」

長谷川「うまかったで。このシチュー」

市子が居なくなる。

長谷川は居なくなっても市子の居た場所を見つめたままその目線の先には後藤が立っている。

長谷川「この後、僕はプロポーズしたんです。穏やかな幸せが僕らには作れると思って、当たり前の、誰にも抜き取れないぶつとい根を生やした、そんな家庭を、僕と市子は作れると思って。…市子は笑って…一瞬笑って、すぐ僕から目をそらして、鼻の頭をぼりぼりする癖をして、また笑って、「へへ、うれしい」って笑って、笑ってたのに、涙が流れて…。僕はかわいいなあとか思って幸せで何の未来の曇りもなかったのに、次の日、仕事から帰ってきたら、家は真っ暗で」

後藤「それが2015年8月27日。その28年前、1987年8月27日。川辺月子が東大阪市で産まれた。その年は、前年に始まったバブル景気で世の中は周囲が見えへんほど浮かれムードやった。誰もが川辺家が目に入らへんような…。それが、彼女を見た最後なんか？」

長谷川「そうですって」

後藤「あんたは、彼女と関わったとされる最後の重要な関係者や」

長谷川「だからなんですか？」  
後藤「知ってることをもつと教えて欲しい」  
長谷川「なんで警察が市子を探すんですか？」  
後藤「事件性があるからや」  
長谷川「市子はええやつでした。後藤さんが言うみたいな事を絶対するような人間とちやいます」  
後藤「じゃあ何で彼女は失踪した？」  
長谷川「わかりません」  
後藤「行き先はどこや？」  
長谷川「知りません」  
後藤「ほんまか？」  
長谷川「ほんまです」  
後藤「じゃあ何であんたは探そうとしいひん？」  
長谷川「市子は絶対戻ってきます」  
後藤「なんでそう思う？」  
長谷川「ずっと一緒にいたらそんなことは話さんでもわかります」  
後藤「誰と一緒にいたんや？」  
長谷川「だから市子ですよ！」  
後藤「存在せーへん人間とか」  
長谷川「は？」  
後藤「存在しないはずなんや」  
長谷川「は？」  
後藤「やのに大勢の人間がその、川辺市子、と関わってる」  
長谷川「は？」  
後藤「あんたの言う、その川辺市子は一体誰ですか？」  
長谷川「……市子は市子ですよ！」  
後藤「いや、川辺市子は存在しいひんはずなんや」

さつきが立ち上がり、前に出る。  
団地の子供達が遊ぶ声がどこからか聴こえてくる。

映像 1991年 4月 市子4歳 月子1歳

さつき「あの、山本さつきって言います。ちよつと昔のことすぎてあんまり覚えてへんのですけど、えつと、まずはどう呼んだらいいんですか？市子？それとも月子？うちが出会ったのは4歳の時で、まだあの子名前が川辺市子で、月子って名前は妹やっただけですよ。そう、妹いたんですよ。いつの日か姿見やなくなっただけ。とりあえず、ややこしいから当時呼んでたみたいに、いっちゃん、って呼ばせてもらいます。で、いっちゃんとの関係は同じ団地に住んでたから気づいたら良く遊ぶようになって、まあ幼なじみみたいな関係ですかね。でも、ほんまに小さい時しか関わってへんからあんまり覚えてへんのですけど……なんとなく覚えてるんは……毎日大体おなじ服来てたような……そう、黒のワンピース。よれよれのワンピース」

なつみが歩いている。

さつき「お母さんばつつか良い服来てて、綺麗なお母さんやって、よくうちのこと見かけたら」  
なつみ「さつきちゃん、今日も市子と月子と仲良くしたってな」  
さつき「って頭撫でられたん覚えてる。若いお母さんで、うちのお母さんは結構歳とってたし、ちよつと憧れたなあ。難波のスナックで働いてるって聞いたことある。うちのお父さんもたまに行ってたらしいし」

なつみが消える。

さつき「いっちゃんと関わらなくなっただけは、小学校入ってからで。同い年やと思ってたのに違ってた、うち一人で入学したんです。あの時は深く考えへんかったけど、とにかくうちが小学校入って新しい友達できてそっちに夢中になって、徐々にいっちゃんには会わんようになっていって、うちが4年生の時に、いっちゃん入学してきたんですよ」  
梢「あ！」

梢が立ち上がり、

梢「もしかして下克上事件って？」  
さつき「え！それうちやわ」  
梢「めっちゃ覚えてる。小学1年が4年に喧嘩で勝ったって事件」  
さつき「もうやめてや恥ずかしい」  
梢「そんなとき、まだうちは月子と仲良くなかったんやけど、そうそううちが仲良くなったんは小学2年生のときで」  
さつき「あ、えっと、小学校上がるときに、いっちゃん、月子に名前変わったんですよ」  
梢「え？」  
さつき「だから、小学校に入る時に、川辺月子から、川辺月子に名前変わったんです」  
梢「え？そなんん？」  
さつき「だって、それまで月子やったもん」  
梢「ややこいなそれ。うちは初めから川辺月子で出会ってるから、月子って呼ばせてもらいます」

映像 1998年 12月 月子11歳 月子8歳

灯油を売る車の音がする。

梢「あ、まだうちの紹介してへんかった。すみません。うち梢って言います。月子とは小学、中学で同級生やって結構仲良くしました」  
さつき「てことは、うちの3つ下？」  
梢「そうそう。で、月子と仲良くなったんは、うち、こう見えて、結構身体の成長早かったです。あれはめっちゃ寒い日。学校ついたら教室のストープに飛びつくみたいな、そんな寒い日で」

月子が立っている。

梢「ほら、月子も身体の成長早かったですよ。ていうか、早すぎっていうか。今考えたら確かにちよっとおかしいくらい早くて。その寒い日に同じクラスやった月子が、あれ、始まってしもて。小2で、あれ、ですよ？そんな子います？でも月子も知らんかったんか血が出たって大泣きして。先生大慌て。男子興味津々。隣のクラスの子とか集まってきて、ほら、小学生ってトラブル大好きやないですか？うちは身体の成長早かったからお母さんから聞いてて、だから月子に教えてあげたんですよ。今晚赤飯やおめでとあって。そこからお互い胸も大きくなってきて、それクラスでうちと月子くらいやったから一緒にブラジャー買いに行こうってなって。まあスポブラですけどね当時。なんか懐かしいわ。あん時、うちと月子まじでもてたんですよね」  
さつき「それ。そのモテてるのがめっちゃムカついて、だってうちの同級生の男子とかも、いっちゃんの事好きとか言う奴いて、歳下のくせにとか思って、いっちゃんの悪口言まくって、嘘つきやであの子って、それでいっちゃん怒って、喧嘩になって、それがさつきの下克上事件なんですけどね。でも、人を叩いたりする子やなかったから、まるで名前が変わったのと同時に別人になったみたいそんな感じしました」

映像 1994年 6月 月子7歳 月子4歳

月子「(さつきに)さつきちゃん！さつきちゃんが小学校に入って、うちはひとりぼっちになって、月子が病氣って分かったんは月子が2歳の時で、うちは、寂しくて、寂しかったから、さつきちゃんが一人で小学校に入って、だから、おかしとか、盗んで、学校帰りのさつきちゃんを、待ってた。そうするしか無かった。今、思えば、今がいつなんか、もう思い出せへんけど…」

なつみが月子を呼ぶ声がする

なつみ「いちこー」

月子「いっだって、お母さんは、うちに大事な話をするときは、遠くから、うちの名前を呼ぶ」

なつみ「いちこー」

月子「この後、うちは、月子になる。なってしまふ。それは、妹が、月子が、もう治らへん、病氣やったから、とかちやうくて」

さつき「後から聞いた話やけど、月子、えっと、市子の妹は」  
梢「デュシェンヌ型筋ジストロフィーっていう筋力が衰えて行く難病やったみたいで」  
なつみ「いちこー」  
市子「もうすぐ、うちは、市子を失う…失ってしまう。やけど、うちは、やっぱり」

なつみが現れる。

なつみ「なんや、いるんやないの」  
市子「うん」

なつみ「今日、何食べたい？」

市子「え？」

なつみ「今日は市子の誕生日やから」

市子「うちは、うちの誕生日は」

長谷川「8月27日」

市子「この日は、6月27日で」

なつみ「月子の誕生日」

なつみ「好きなもんなんでも作ったげる」

市子「お母さん」

なつみ「あのね、市子は今日から月子なんやよ」

市子「え？」

市子「確か、そんな風に、あっさりと、お母さんは、うちの名前を奪っていった」

音楽が流れる

なつみ「今日は市子の誕生日やから」

市子「え？」

なつみ「好きなもんなんでも作ったげる」

市子「お母さん？」

なつみ「あのね、市子は今日から月子なんやよ」

市子「うち、このとき、いつも忙しいお母さんが相手してくれることが嬉しくて」

なつみ「1994年の6月27日。月子の誕生日。この年から小学校に入学するはずやった市子を小学校に入学させへんかったんは…この日から市子と月子の名前と年齢を交換させたのはうちです。うちの身勝手な行動でした。月子が病気になるって、バブルがはじけて、資産家やった夫は逃げるように消えて、自殺したって聞いたんは、この日の半年くらい前やったやろうか。市子は無戸籍やったんです。もう社会人として生きていくことを奪われた月子の戸籍を、市子のために使ってあげよう思ったんは、間違いやったんではないか？」

市子となつみは手を繋いだまま

市子「夏は、どうしたって、いつだって、」

後藤「このお話は川辺市子という女の子が1987年に生まれ、2015年に行方不明になるまでの彼女の人生を想像したお話です」

キキ「はい！彼女のことが知ってます」

北「はいはい！確かに知ってます」

宗介「やけど、知ってるのは、」

梢「彼女に関わった僅かな時間で、」

さつき「出会った沢山の人達の中のたった一人で」

後藤「やから、想像するしかないんですよね」

長谷川「やけどそんな彼女のことを、僕は、本気で愛しました」

さつき「うちは嫌いやったなあ」

梢「まあ、はじめは好きやったけど、」

さつき「途中で喧嘩して」

キキ「そんなことで？」  
さつき「小学生のときやったし」  
梢「よく笑う子で」  
さつき「そうそう、カルピスが好き」  
小泉「色気があって」  
さつき「年齢詐称」  
小泉「やっぱり、おかしいなあと思ってん」  
宗介「そうやとしても」  
さつき「今はちんちくりん」  
梢「うちのほうが色気ある」  
小泉「たしかにー」  
宗介「タイプです！」  
梢「あんたとはもう終わったの」  
北「あのさー」  
キキ「甘いもんが好き」  
さつき「あー、そういえばケーキ」  
キキ「喜んでくれたなあ」  
さつき「うち来てよく食べてたし」  
北「ちよっと聞いてや」  
梢「あんた」  
キキ「あー、噂のストーカー」  
さつき「えー」  
北「ちやうつて」  
宗介「市子はなかなかエッチをさせてくれへん子で」  
梢「そーすけー」  
宗介「ごめんなさーい」  
北「お前したん？」  
小泉「お母さんやろ」  
北「それな」  
長谷川「過去は過去や」  
後藤「それでも罪は罪」  
長谷川「市子はそんなことせーへん」  
後藤「食い違いがありすぎる」  
北「事件はさかのぼって2008年市子18歳の」  
市子「夏」

全員、市子を見る

市子「夏は、どうしたって、いつだって、暑すぎるから、」  
なつみ「……」  
市子「お母さん」  
なつみ「なに？」  
市子「うち、月子のこと……」  
なつみ「なに？」  
市子「……なんかうまく思い出せへんけど」  
なつみ「変な子やなあ」  
市子「やけど、きつと」  
なつみ「ほら、もういくで。市子は今日から月子なんやからね」

市子、出て行く

映像 タイトル「川辺市子のために」

音楽がゆっくりと止んでいく

## 2 川辺なつみについて

映像 2008年 8月 市子21歳 月子18歳

セックス後の様子のなつみと小泉  
場所は川辺家

夕方

季節は暑さが少し残る初秋  
麦茶を飲むなつみ

小泉「(タバコをつけながら)冷たい麦茶、絶対飲みますね。した後」

なつみ「正雄くんも、絶対タバコ」

小泉「その呼び方」

なつみ「かわいいやん」

小泉「嫌なんです」

なつみ「うちは好きや」

小泉「なつみさんに言われたら…」

なつみ「麦茶飲む？」

小泉「タバコ吸ってますから」

なつみ「ええから」

なつみ、飲みかけの麦茶を小泉に無理矢理飲ませる

滴る水滴

小泉、なつみを見つめている

なつみ、挑発するようにもう一口麦茶を飲む

小泉「もつかいしたくなってしもた」

なつみ「うちも」

キスをする二人

なつみ「でもあかん」

小泉「え」

なつみ「そろそろ市子が学校から帰ってくる」

小泉「やけど」

なつみ「(挑発しながら)ガマン」

小泉「う…うん」

なつみ「ほな帰って」

小泉「次、いつ来たらええですか？」

なつみ「うちはいつでも待ってる」

小泉「ほんまずるいです、なつみさんは」

出て行く小泉。

なつみ「うち、この人と体の関係だけ続けてました。元々は、スナックのお客さんで、うちのことで気に入って来てただけやったんやけど、性依存って言うんですか…そういうのうちの旦那とのことで引きずってて…一旦は収まったと思ってたんですけど」

北「ちよっと待ってください」

なつみ「え？」

北「全然ちゃう」

なつみ「なに？」

北「全然ちゃうんですけど、これ誰が作った話？」

後藤「川辺なつみ本人の証言や」

北「いや、川辺なつみは今行方不明やないですか」

後藤「その前に聞いたんや」

北「やとしたら川辺をかばってたってことか？」

長谷川「え？」

宗介「あのー、これいつ頃の話ですか？」

後藤「小泉が死んだ日から2008年の9月頃」

宗介「それって月子…あ、さっきの話からしたら市子って言ったほうがいいんか？」

梢「ていうか小泉って死んでんの？」

キキ「ほんまややこしい」

後藤「あー、ちょっと色々統一した方がええな。川辺月子やと思ってた人？」

梢、宗介、北、後藤が手をあげる。

後藤「ほんなら川辺市子やと思ってた人？」

長谷川、キキ、さつき、北が手をあげる。

みんな、北に反応する

北「いや、途中から知っててん」

後藤「とりあえず、川辺市子で統一しよう。妹がおったのはもう知ってるやんな？妹のことを月子ってことで」

宗介「ほんなら市子って事でさっきの話やけど、その日の後、すぐに市子は失踪したってことですよ」

後藤「そうやね」

宗介「あのー、俺市子の高校時代の彼氏の田中宗介っていうんですけど、まあ市子とは結構長く付き合ったし色んな話もしてたんやけど、全然家のことは話してくれへんくて」

後藤「それで？」

宗介「一回、ほんまにお願いやからって家に連れてって貰った時があつて、それが確か修学旅行のちよつと前やったから、5月くらいやったかな。「団地やから恥ずかしいねん」って市子は言つてて、「そんな気にせーへんから」って、まあ俺も高校3年やつたし、童貞卒業したかつたっていうか…まあ、確かについたらお世辞にも金があるって感じの場所やなくて、あの町ってなんか全体的に灰色がかつてるっていうか、トーンが暗いんですよ。んで、市子の住んでる団地の近くまで来たら、「ちよつと待ってて、部屋の様子見てくる」って公園みたいなところで待たされて。団地やから公園あるんですよ。ちよつと待ってこーへんから、電話した毛とかになつてて、それ蹴って待ってたん覚えてます。で、結構待っても戻ってこーへんから、電話したんやけど繋がらなくて。ほんだら、女の人の悲鳴が聞こえて、男の人の大声が聞こえてきて、団地の方から。それが市子の部屋やったんかわからんのですけど、確か「誰に向かって口聞いてんのじゃ」みたいな物騒やなあ思つて、まあ場所が場所やし…と思つてたら、徐々に救急車近づいてくるんですよ。いやあ、まじか、さっきのか、とか思つてたら、案の定この団地に止まって、ほしたら、市子が走って出てきて、その後ろから市子の母親らしい人とタンカに乗った男が出てきたんですよ」

後藤「それが？」

宗介「そう、その死んだ小泉って男やつたんですよ」

小泉が川辺家に入ってくる。

なつみが月子の部屋を閉める。

小泉「調子は？」

なつみ「何しに来たん？今日は面会の日とちやいますけど」

小泉「気にしてきてんねやろ」

なつみ「月子のことは、ちゃんと診てますから。もう面会の日だけにしてください」

小泉「なんやねん、前はもつと優しくしてくれたやろ？」

なつみ「くさい」

小泉「え？」

なつみ「酒飲んでんの？」

小泉「一杯だけ、今日暑いからな」

なつみ「公務員のくせに…」

小泉「なあ、ええやろ？」



小泉、なつみを抱きかかえて

なつみ「…もうやめたんです」

小泉「やめれんよ、あんたは」

なつみ「男は…信用ならんから」

小泉「セックス依存症のくせに」

なつみ「やめて」

小泉「ほんまは濡れてんねやろ」

なつみ「やめろって」

なつみに思い切り突き飛ばされる小泉

なつみ「…月子が隣にいるんよ」

小泉「今まで…何度もしたやろ？」

なつみ「変わりたいんよ…ごめんやけど…帰って」

小泉「(財布から2万円を取り出して)」

なつみ「それも、もうやめたんです」

小泉「(更にお金を出して) 後幾ら払えばしてくれる？」

なつみ「小泉さん」

小泉「なつみさんが好きやから」

なつみ「それやったら分かって」

小泉がなつみを押し倒す

抵抗するなつみ

市子が帰宅してくる

小泉を引き離そうとする市子

激しいもみ合いの中、ようやく小泉が引き離される

小泉「…おかえり」

市子「…月子がいるんやから」

小泉「月子はお前やろ。あいつは、もう死んでるようなもんやろ。呼吸器つけない一人で生きる事もできんよ  
うなつて。おかしいで。お前も、なつみも」

市子「うちは、この言葉に、心底腹が立って、やけど、自分が月子でも市子でもないって事実が」

市子「お前みたいなくそみたいな男よりちゃんとして生きてるわ！」

小泉「誰に向かって口聞いてんのじゃ！」

市子「我を忘れて、傍にあった傘で思いっきり足を、殴って、殴って、殴った。お母さんは慌てて、うちの  
ことを止めて、それで、119番で救急車を呼んだ。悲しかった。月子のことも、うちのことも、お母さ  
んのことも、なにかもが、悲しかった。宗介は、見たやろうか、うちの腫らした目を見たんやろうか」  
宗介「見たで。泣いてたなあ。忘れてたわ。あんときは覚えてたのに。…ごめん」  
市子「思い出してくれて、ありがとやで。うち、宗介が初めてで良かったわ」

宗介「これが、俺の市子から聞いた話です。やから、たぶん小泉は酷いやつで、さつきみたいな男とちやう  
ど思うんです」

宗介「…あの、みんなの知ってる、市子のこと教えてください。俺、こいつのこと、最後まで知ってあげ  
なあかんと思う。みんなも、市子と関わったんやったらちゃんと知ってやらなあかんと思うんです」

### 3 市子と月子の矛盾

映像 2001年 7月 市子17歳 月子14歳

梢「うちが知ってることは、市子とは楽しい思い出がほとんどです。知らんことの方がめっちゃある。うちこの宗介と中学2年生の時に付き合ってたんです。受験勉強で別れたんやけど、てゆうか市子と付き合ったとか知らなかったわ。最低やであんた。…で、宗介と一緒にいることが増えて、まあ市子が学校に来なくなったからなんですけど。聞いたらアルバイトしてるって言うから、嘘やと思ってるって怒ったんです。14歳やったらバイトってまだできひん年齢やったら。ほしたら、市子真面目な顔して、「梢ちゃんにだけほんまのこと言うって。うち、ほんまは月子やなくて市子って名前やねん。ほんまは今17歳やねん」ってめちやくちな嘘つくなああって思って本気で怒ったんですよ。小学校とき、市子ってちよつと問題児で、嘘付きで有名やって、たまごつち流行ったときとか、クラス中のたまごつち盗んで配ったり。さつきちよつと話に出た下克上事件。あれも、原因は市子が嘘つきやって噂を、さつきさんが流したからが原因らしいし。とにかく、嘘つく癖あったんです。だから、真剣に怒ったんです。「嘘ばっかついてたら友達やめるで」って。市子それでも嘘ちやうって言うから、だからほんまに無視したら学校こなくなっただです」

映像 2008年 10月 市子21歳 月子死亡

キキ「うちは、市子ちゃんと出会ったのが皆さんより遅くて、2008年の肌寒くなってきた季節やったかな。うち、奈良でパティシエになるために有名なお店で修行させてもらってて、生活のことあるし新聞配達のバイトしながら寮に入ってたんです。そこに市子ちゃんも来て。そうそう、うちには、誕生日も名前も川辺月子やなくて、川辺市子って言った。寮って言ったもそんな仕事あるわけちゃうから、二人つきり。二人しかおらんから仲良くしやなと思っただけたりしてたんやけど、全然愛想なくて。ほんま笑うような子ちやうかつたんですよはじめ。甘いのは好きやったみたいで、うちが修行で作ったケーキもって帰ってきたら食べてくれて、」

キキ「市子ちゃん」

市子、慎重に扉を開ける

キキ「今日も食べてみてくれへん？」  
市子「うん。いつもありがとう」

ケーキを市子に渡す

市子「入る？」  
キキ「ええの？」  
市子「うん」

キキ、部屋に入る

キキ「この日、初めて市子ちゃんの部屋に入れてもらってたんです。ほんまに何にもない部屋で。テレビも無かったし、部屋にこもっていつも何してるんやろって思ったん覚えてる。あ、窓際に花瓶があって、花が飾ってあったな」

キキ「花好きなん？」

市子「あ、うん。花は枯れるから。ちゃんと水あげへんと枯れるから。好き」

市子、ケーキを食べる

市子「おいしい」  
キキ「ほんま？」  
市子「これ何っていうケーキなん？」  
キキ「今な、塩スイーツ流行ってんねん」  
市子「塩？」  
キキ「そう。はじめて食べたん？」  
市子「うん」  
キキ「カフェとかいのかん？」  
市子「いかん」

キキ「そっか」  
市子「うち、これ好きや」

市子、笑う

キキ「あ、笑った」  
市子「え？」  
キキ「笑うのあんまり見たことないから」  
市子「ああ」  
キキ「うちな、パティシエになるの夢なんよ。自分のお店持つのが」  
市子「へー」  
キキ「市子ちゃんは？」  
市子「うち？」  
キキ「うん」  
市子「うちは？」  
キキ「うんうん」  
市子「うち、夢とか追ったらあかんわ」  
キキ「なんでよ」  
市子「でも、ケーキは好き。小さい頃な、さつきちゃんって近所に仲良しの子がいてな、うち、お母さんしかおらんくて、お母さんいつも忙しかったから、よくさつきちゃん家に寄せてもらってたんやけど、おばちゃんケーキいっつもくれてん。いやしいけど、それ大好きで黙ってケーキ出してくれるのいつも待ってたなあ。普通のショートケーキなんやけど、」  
キキ「(笑うのをこらえている)」  
市子「どしたん？」  
キキ「市子ちゃん、めっちゃケーキ好きなんやな」  
市子「あ、うん。これ、初めての味や。美味しい」

キキ、ケーキを食べる市子を見ている。

キキ「なあ、じゃあさ、いつかさ、うちと一緒にケーキ屋やろう？」  
市子「え？」  
キキ「いいやん。そんな好きなんやったら絶対頑張れるって」  
市子「へへへ。ありがと：考えとくな」

市子、出て行く

キキ「そんなとき、市子ちゃん泣きたそうにしてた」

キキ「市子ちゃん」

市子、振り返って

キキ「なんか：あった？」

市子「：キキちゃんが、キラキラした目でうちのこと見るから、辛くなってしもて、でも甘えたくもなってしもて、うち、言っしてしもて」

市子「うちな、人殺してしもた」

キキ「え？」

市子「うそうそ」

キキ「：えー？」

市子「なーんもないよ。いつも優しく話しかけてくれてありがとやで」

市子、出て行く

キキ「うち、信じてなかったんです。やけど、それから少しして、市子もうちの修行してるとこでバイトす

るようになったんやけど、そこに、（北に）この人。ストーカーみたいに何度も来るようになって」  
北「ちゃうって」  
キキ「市子ちゃん困ってた」  
北「ちゃうねんって」  
キキ「やけど、この人が言ってたことが気になって」  
北「川辺月子やんな？」  
キキ「そう。市子ちゃんは、川辺市子やのに、何度も」  
北「絶対、川辺月子やん。なんで嘘ついてんの？」  
キキ「やっぱり、市子ちゃんは嘘つきなんやろうか？」

キキが席に座る  
勢いあまってステージ上が上がっている北。

映像 2015年 8月 市子28歳 月子死亡

宗介「あ！お前！」

北「なんやねん」

宗介「ちよ、こっち向けて」

北「いらんわ」

宗介「ええから向けて」

北「やめろって」

宗介「（顔を覗いて）あ！（笑って）やっぱ北やんけ。ちよ、今思い出したわ。久しぶりやな」

北「忘れてたんかい」

宗介「こいつ、俺と市子と高校の同級生なんすよ。んで、俺が市子と付き合ってる時に、しつこく何回も市

子に告白しまくってて」

北「言うなって」

宗介「何回振られてもしつこいから、俺2回くらいボコボコにしたんすけど」

北「3回やわ」

宗介「お前ストーカーになってたんか？」

北「だからちゃうって言ってるやろ」

後藤「君が川辺市子の周囲をウロウロしてたって証言はあちこちから聞いてるけど」

北「え？」

後藤「ちやうんか？」

北「昔の話やって」

梢「きもちわるー」

後藤「何でウロウロしてたんや？」

北「だから、あいつが嘘つきよるから」

後藤「嘘？」

北「名前ですって」

後藤「名前」

北「何で嘘つくんか聞かな納得できんかったから」

後藤「なんで？」

北「あいつのために…」

後藤「あいつの？」

北「（長谷川に）それやのにこんな男作りやがって」

長谷川「え？」

北「会ったことあるやろ？」

長谷川「（今頃気づいて）ああ、あの」

北「なんやねん」

長谷川「すぐ逃げたから」

北「逃げたけど」

後藤「川辺市子が失踪したのはなんでやと思う？」

北「知らんって」

後藤「お前何か知ってるやろ？」

北「知らんって」

後藤「何でウロウロしてたんや？」

北「やから…」  
後藤「ストーカーやないんやったら何でや？」  
北「……」  
後藤「怨恨か？」  
北「ちやうよ」  
後藤「怪しいな」  
さつき「あの、」  
後藤「ん？」  
さつき「うちら、怪しまれてるんですか？」  
後藤「そういうわけやない」  
キキ「でもこの人やっばり怪しい」  
後藤「黙秘するんやったらそれでもええけど」

北に視線が集まる。

北「(耐えられず)許せんかったから。ストーカーとか、そんなんちやうんです。川辺とは高校で初めてあって、確かに好きにはなっただけですけど、でも、真面目に好きやっただけなんです。僕学校で友達できひんかって。いじめられてたんちやいますよ？周りが子供っぽすぎたから。なんか川辺もおんなじ感覚っていうか、友達あんまいなかつたんです。ほんで、好きになってしもて。目合ったら、笑うんすよ。めっちゃ可愛いくて、っていうか、そんなんされたら気持たれてるって思うやないですか？やから…」

後藤「後をつけまわした？」  
北「ちやいますって」

後藤「君が川辺市子と再会したんはいつ頃や？」

北「忘れたそんなん」

キキ「2011年の2月。震災が起こる前やったから覚えてる」

北「そうや」  
後藤「居場所をどうやって知った？」

北「たまたま行ったケーキ屋におって」

後藤「嘘はばれるで」

北「ツイッターで探してるって書いたら情報来て」

梢「え！こわっ」

後藤「何でそこまでした？」

北「やから」

後藤「やから？」

北「あいつ裏切ったっていうか。まじで殺したろかって思ってたから」

梢「殺す？」

キキ「やっばり」

北「いや、ちやうやん」

後藤「お前」

北「ちやうって」

後藤「殺したんか？」

北「あほか、殺すわけないやん。(みんなに)ちょっと、落ち着こう」

少し間。

北「やから、確かに一回殺したろかって思ったけど、実際殺せるわけないやろ」

宗介「…なあ」

北「もうええやろ」

宗介「ほんまに殺してへんねやったら話せよ」

北「話したやんけ」

宗介「全部話せて」

北「これ以上知らんって」

宗介「ほんまに知らんのか？」

北「知らんって」

宗介「ほんまか？」

北「知らんって」

宗介「市子が心配やねん」

北「そんなん僕もやって」

宗介「(土下座して) じゃあ話してくれ。頼むわ」

北「ちよっと」

宗介「市子は何を裏切ったんや？」

北「やからそれは」

宗介「話してくれんとなんでおらんようになったんかわからんやろ」

北「話したってわからんて」

宗介「わかるかもしれん」

北「んなわけあるか」

宗介「(再び土下座して) 頼むわ」

北「:なんでそんなことすんねん」

宗介「市子と付き合ってた。付き合ってる途中でいきなりおらんようになった。やのに、探さんかった」

北「なんで探してあげへんかったん？」

宗介「そんとき二股しとった。市子、体だけ発育良かったやろ」

北「はあ？」

宗介「ごめん」

北「ほんましばいたるか」

宗介「ごめん」

北「好きやなかったんか？」

宗介「好きやなかった」

北「お前、殺したるか！」

宗介「だから、今、:今さら」

北「今更やでおまえ」

後藤「お前が殺してないんやったら話せるやろ？」

さつき「いっちゃん、死んでるかもしれへんの？」

後藤「分かん、川辺市子は謎が多すぎる」

長谷川「絶対生きてる」

後藤「どっちにしても探し出さなあかん。君が話さんかったら手遅れになるかもしれんな」

北「え」

長谷川「頼むから話してくれへんか？」

クマゼミが耳障りに鳴き始める。

北「あの、話しますわ。もう、なんか、やっぱ話さなあかんかったかもしれん」

長谷川、宗介が席に戻る。

#### 4 罪と罰

映像 2008年 9月 市子21歳 月子死亡

北「あれは、2008年の9月頃で。僕も川辺も高校三年生で。まだまだめっちゃ暑い日やって。学校終わって川辺の家まで行ったんです」

北「ちやうって、もうええから」

北「暑かったからデイリーでガリガリ君買って食べてたら、川辺もデイリーから出てきてガリガリ君買って。やば！めっちゃ気合うわーって思ってた、珍しく向こうから話しかけてくれて。ほんでゆっくりアイス食べながら駅まで歩いて。溶けんの早くてさ、指に垂れるの汚いとか

笑いながら。川辺食べんの遅すぎて結局棒から落ちて。何か:可愛かった。ほんで駅どこなん?って聞いた

たら、長瀬駅やう言うから。電車一緒やったん知ってたんやけど、「え!一緒の線やん」とか言って、

一緒に乗って。僕の方が先に駅着いたんやけど、長瀬駅に用事あるって嘘ついて、一緒に駅降りて、ほんで改札出て、バイバイして。小さくなっていく川辺の背中暫く見てた。見てたら、足取りゆっくりなって、

落ちてた石ころ蹴り出して、こっち：振り返って。気色悪がられたって思ったら、手降ってくれて。だから、振り返した。川辺、笑って、その後は、走っていった。：なんか、そんな風に接してくれたん初めてやったから、僕も走って追いかけてしまっただけ」

太陽が眩しく光っている。

北「めっちゃ暑くて。汗だくになって。川辺んち団地やって。階段上がってく姿見つけて、家の前に着いたらインターホン押してて、ほんだからドア勢いよく開いて、川辺の体が強く引っ張られた感じで、部屋に吸い込まれて」

小泉と市子が部屋の中に居る。

北「僕、なんか恐なってもうて。部屋に近づくかどうか：暫くじっとしてた」

市子「お母さんは？」

小泉「仕事やる？」

市子「こんな時間から？」

小泉「……」

市子「……」

小泉「……なんか食いもんじゃないか？」

市子「ないわ」

小泉「憎たらしいな。市子は」

市子「……月子や」

小泉「……ややこしいな」

市子「……」

小泉「暑いなあ」

市子「……」

小泉「なつみさんはずるいで」

市子「……」

小泉「嘘ばっかつきよる」

市子「……」

小泉「一個の小さい嘘は、嘘でしか守れへん」

市子「うちのせいや」

小泉「いつかはばれる」

市子「……」

小泉「俺ももう同罪や」

市子「……」

小泉「月子は、ほんまに死んだんか？」

市子、黙って上着を脱ぎ、

市子「これが目的やろ。ほんで帰って」

小泉「お前ら親子はほんま悪魔やな」

小泉、市子を抱き寄せる。

小泉「やめたいおもてる」

市子「はよして」

小泉「やめたいおもてんねん」

市子「勃ってるくせにきしよい。はよして」

小泉「……」

市子、小泉に平手打ち

市子「はよしるや。地獄やねんこの時間」

市子を押し倒す小泉。  
結局抵抗してしまう市子。

市子「やめて。いやや」  
小泉「ごめん」

更に市子を襲う小泉

市子「(更に抵抗して) やめてください。やめて」

逃げる市子。

小泉「もうやめれんやろ。こうなつてもたんやから」

市子「いやや…戻りたい」

小泉「お前が市子やった時にか？ 月子が死んだときにか？ 戻れへんよ。お前は嘘ばかりや。名前も年齢も嘘。戸籍も無い。存在してへん人間なんや。いくら嘘ついてもいつかはばれる。月子が死んでんのもすぐにばれる」

市子「いやや」

小泉「嫌でもそれが現実や」

市子が泣くのに呼応したように、クマゼミの鳴き声が大きくなり

小泉「うるさい！ 黙れ！」

北「ここ、ここで、僕は、家の前に辿り着いて。泣きわめく川辺の声と、聞いた事ない声か吐息かわからん男の人の音がして、ほんで、静かになつて」

市子「台所にあった包丁で、刺してしもた。うち」

北「ドアノブ回したら、開いてたから」

北「川辺さん！」

北「つて、声上げても返事ないから、家上がった。そしたら」

市子「台所にあった包丁で、刺してしもた。うち」

北「床にへたりこんでる川辺がいて、男の人が血だらけで死んでて」

市子「(北の台詞の間繰り返し) 台所の包丁で、刺してしもた、うち」

北「僕、思ったより冷静で、すぐドア締めて鍵締めて、カーテンとか開いてるとこないか調べて全部閉めて、ほんで、川辺に着替えるように言つて、遺体のどんどん流れてくる血を、こんなに人間で血あるんつてくらい止まらんくて、それ拭き取つて、包丁と着替えた川辺の服と鞆に突っ込んで、冬用の蒲団に男をくるんで縛つて、ほんで」

北「川辺、僕が助けたるから。川辺のヒーローになること想像してたし。大丈夫やから」

北「つて、言つて男を背負つて、外に川辺と一緒に飛び出して。一番近い線路に向かって走つた。何人か人とすれ違ったけど、あんま気にされてへんかって、とにかく急いで怪しまれんように線路に向かって走つた。んで、線路が見えた頃に、振り返つたら、付いて来てたはずの川辺がおらんくなつて、でも僕死体背負つて、混乱しても、とりあえず、死体を人気のない線路に寝かせて、蒲団背負つてまた川辺の家に向かつて走つた」

踏切の音が鳴り

全員が冒頭と同じく、何かを目撃しようとしている。



梢「やばいこれって」  
さつき「蒲団背負って走ってる高校生…うちのお母さんが見たって」

市子「蟬が鳴いてて…それは暑い日で…めっちゃ暑い日で…大阪はクマゼミが多いなあ…とか、考えながら、  
うちは踏切を待ってる」

梢「乗ってた、この電車」

電車が通り過ぎる音。

市子「勢いよく走り去るその向こう側にうちは…」

北「蒲団背負って汗だくで走ったその後ろで」

クラクションが響き渡り、人を轢く骨が砕ける独特の音。

梢「いやや！」

クラクションが消えても蟬の音が耳に残り続け、

市子「(太陽を感じて)今日も暑いなあ」

音が止み、太陽が消えて行く。

すると、市子も消えて行く。

全員の時間が止まったかのような時間。

宗介「ごめん、どこまでがほんまの話？」

さつき「その事故、覚えてる。うちの近くやったし変な事件やったから」

梢「死んだの、市役所の小泉って男。ニュースで見た」

さつき「やけど何で事件にならんかったん？刺し傷とかあったはずなのに」

後藤「捜査に関わったけど、不可解な事件で、遺体はバラバラでぐちゃぐちゃで酷い状況で、轢かれる時に

生きてたんかどうか分からないかった」

宗介「これがほんまやったら、市子は人殺しってこと？」

長谷川「市子はそんなこと絶対するような子とちゃう」

北「嘘ちゃうから。嘘つく必要ないやろ」

宗介「急に学校来んくなって、連絡取れなくなったの考えたら」

さつき「ていうか、これって死体遺棄罪か何かですよね？」

後藤「死体遺棄罪は3年で時効が成立する。今は2015年やから彼を捕まえることはできひん」

北「…だから言いたくなかったん。僕のことだけちゃうし、川辺は…時効にならんから」

さつき「人殺してんねんで？罪償わなあかんやろ」

北「わかってる」

さつき「あの子やっぱ変やったもん。いつか殺すんちゃうかと思ってた」

北「言い過ぎやろ」

さつき「絶対見つけて捕まえなあかん」

梢「そうやな」

さつき「殺人犯がどっかにおるとか絶えられん」

宗介「正当防衛やろさつきの話やったら」

後藤「川辺市子の団地から事故のあった線路までは300メートルはある。君の話が本当なら、刺された小

泉の悲鳴を聞いた人間がおらんかった。すれ違った人が蒲団を背負って走ってる高校生を怪しまんかった。

事故のあった現場の近くの踏切に人が居なかったと言うことになる。それも日が暮れる前の白昼に」

梢「それおかしいわ」

北「嘘つく意味ないやないですか」

後藤「ほんまは君が川辺市子を殺し、それを隠蔽しようとしてるんちゃうんか？」

北「なんで…」

宗介「でも、小泉が自殺したんやったら、どっちにしても一人で線路に入って寝転んだってことになるけど、それも誰も見てなかったとは思えへん」  
梢「ほんまやわ」  
さつき「じゃあ、人殺しやなかったら何で今逃げてるん？」

全員が、市子の事を想像する。  
すると、そこに市子が居る。

映像 2011年 2月 市子24歳 月子死亡

1

北が横に歩み寄り、

北「どうゆうことやねん？」  
市子「……」  
北「川辺月子やろ？」  
市子「ごめん」  
北「…何？」  
市子「うち、市子やから」  
北「ちゃうやん」  
市子「市子やから、もう店に来んとして欲しい」  
北「はあ？」  
市子「市子として生きてんねん。そう決めてん」  
北「はあ？」  
市子「やから、月子のことは忘れて」  
北「いや、お前月子やん。市子って誰やねん」  
市子「うちは市子や」  
北「俺と川辺がしたこと分かってんのか？」  
市子「…わかってるよ」  
北「ほんならちやんと俺と向き合えって」  
市子「…向き合いたくない」  
北「ふざけんなって」  
市子「ごめん。うちな、夢できてん。友達もできて、今。市子として生きていけそうって思えてんねん。月子のことは思い出したくない。やから、感謝しとるけど分かってほしい」  
北「あほか」  
市子「あほでもいい。うち市子として生きていきたい」  
北「俺と川辺は人を」  
市子「言わんとって」  
北「…そんなん、そんな嘘すぐばれるで」  
市子「……」  
北「殺人罪に時効は無くなつたんやで」  
市子「…それでも、うち、ばれるまでこのまま生きていきたい」  
北「…俺が一生黙ってると信じてるんか？」  
市子「わからん」  
北「川辺…」  
市子「お願いもせーへんから」  
北「俺がお前を守ったるって」  
市子「ありがとう」  
北「俺しか守れへんから」  
市子「やとしても、うち、やっぱ新しい人達と生きていきたい。昔を知ってる人と関わりたくない」  
北「…俺はどうしたらええねん」  
市子「北くんも好きに生きてええよ。忘れたかったら忘れたらええし、忘れたくなかったら忘れんかったらええ。うちのこと話したかったら話してもええよ」  
北「川辺…悪魔やで」  
市子「（笑ってしまう）」  
北「（笑ってしまう）…夢ってなんやねん？」

市子「えー」

北「教えてくれたってええやろ？」

市子「ケーキ屋をな、友達と一緒に開くのが夢やねん」

北「だからケーキ屋で働いてんのか？」

市子「うん」

北「友達ってあの店の？」

市子「そうキキちゃん。うちを誘ってくれてん。一緒にお店開こうって」

北「うん」

市子「キキちゃん、めっちゃ明るい子でな、なんか全然細かいこと気にせーへん子で」

キキ「今が良ければそれでよし、それなら未来はきつと明るいんやぞー」

市子「市子ちゃん、大事な今は今やで。今どう思うかやで。ってそればっか言う子で」

北「なんかめっちゃ都合いい理論やなそれ」

市子「ほんまに。やけど、救われたんよ」

キキ「うち、（北に）この人が来るまではほんまに市子ちゃんと仲良かった」

市子「キキちゃん」

キキ「やけど、（北に）この人が」

北「絶対川辺月子やん。なんで嘘ついてるん？」

キキ「って何度も言うから、ちよつと気になってしもて、色々知ってしもて」

市子「キキちゃん」

キキ「市子ちゃんが新聞配達の際に入ったんは、うちが早朝にいつもみたいに新聞の仕分けしたら、フラフラと店の前に現れて、じつと店を見てて」

市子「うちが行く宛もなく道ばたで座り込んでたら、新聞配達してるキキちゃんを通りかかって」

キキ「新聞ちよつと見せて欲しいって言われて…あれ？」

市子「何してんの？って声かけられて、うち…あれ？」

キキ「確か、ケーキ食べてくれたのが嬉しくて、また食べてくれる？って」

市子「それから、何度かお腹空いたらケーキ食べに行った」

キキ「あんまり家に居たくないって言ってたから、うち寮やから入る？ちよつと一人辞めはって、入れると  
思うしって」

市子「キキちゃん。キキちゃんが居たから、うち、もっかい生きて行こうって思えたんよ」

キキ「あんときの市子ちゃん、ホームレスみたいやった。毎日同じ服来てて」

市子「ははは」

キキ「なあ、月子って誰なん？」

市子「え？」

キキ「ほんまは誰か知ってるんやないの？」

市子「知らんよ」

キキ「じゃあさ、何で毎日夜中に外でフラフラしてたん？」

市子「家に帰りたくなかったから」

キキ「家はどこなん？何があったん？何で話してくれへんの？うちがいつも喋ってるから？ケーキが好きなのは？一緒に店やるって笑って返事くれたのは嘘？うちのこと信用できひん？嫌い？うちは市子ちゃん

こと」

市子「キキちゃん」

キキ「なに？」

市子「今が良ければそれでよし。それなら未来はきつと明るいんやぞー」

キキ「……」

市子「昔のこと話さなあかん？」

キキ「友達やん」

市子「友達……」

キキ「友達やったのに！」

市子「うちは、市子やで。月子とかよーわからへんわ」

キキ「市子ちゃん、そう言っつて、笑つてた。なんかその笑い方が気味が悪くて」

市子「うちはちよつとずつ避けられるようになった」

キキ「そんな時に、あの震災が起こった。東北の、映画でも見てるみたいなの、あの風景が連日テレビで流れるようになった。うちは、自分の夢を追いかけることが恥ずかしくなつて、他に今出来ることをせなあかんと思っつて、東北のボランティアに参加することにした。やから、それからの市子ちゃんをうちは知らないのです」

市子「キキちゃんが急におらんようになって、日本は震災やとか、原発やとか、政権交代やとか、いろんなこととてむちゃくちゃになつて、うちは呆然と生きてた」

市子の電話がなる

映像 2011年 7月 市子24歳 月子死亡

市子「もしもし」

長谷川「……」

市子「もしもし」

長谷川「え、あ、すいません」

長谷川、電話を切つてしまう

長谷川、もう一度電話番号に記載された名前を確認してかける

市子「もしもし」

長谷川「あ」

市子「……はい」

長谷川「すいません、長谷川です」

市子「……どの長谷川さんですか？」

長谷川「川辺……さんじゃないですよね？」

市子「……川辺ですが」

長谷川「え」

市子「え」

長谷川「え」

市子「……あのう」

長谷川「川辺市子……さんですか？」

市子「……そうですけど」

長谷川「なんで……」

市子「……市子です」

長谷川「また、電話します」

市子「え……」

電話が切れる

市子が消える

長谷川「僕が電話したんは、このタイミングやったんですね…」

## 5 そして失踪へ

映像 2008年 9月 市子21歳 月子死亡

長谷川「僕には市子と同姓同名のもう一人の川辺市子ってフィアンセがいて、そう、難波のお好み焼き屋で、その子の誕生日の前の前の日で。誕生日にプロポーズしようと思ってたのに、そのために色んな準備隠れてしてたのに。何か一緒にお好み焼き焼いたら…結婚するってなってるって…そうそう、そんな時に店で流れてたんが何でか、mihimaru GTの気分上々→で。変にテンション上がったのも一理あるんかもしれんけど」

蝉が鳴き、踏切の音が鳴る。

長谷川「その帰り道、久しぶりに手繋いで鶴橋で近鉄大阪線に乗り換えて、妙にゆっくり走ってるなあと思ってたら、なんか俊徳道の近くの踏切に一人の女の子が顔くしゃくしゃにして泣いてて…。そう、泣いてて、安っぽい黒色のワンピースで、高校生くらいに見えて、その日はめっちゃ暑い日で、夕方やのに蝉はうるさーてうるさーて、今思い出したわ…。その後すぐ、電車は停車して、長瀬駅近くの踏切で人が轢かれたとか、なんかそんな放送があって…」

救急車のサイレンが鳴って

長谷川「あれがそうやったんか…あの子が市子やったんや…市子はそれから僕と出会って、フィアンセやったあの子と同じ名前やって、それが運命やとかお互いに思ってた…会って、酒飲んで、浴びるほど飲んで、安いアパートに転がり込んで、まだ飲んで、飲んで…それと一緒に住むようになって…」

映像 2011年 7月 市子24歳 月子死亡

長谷川が電話を耳にあて

長谷川「すいません、長谷川です…」

長谷川「僕のフィアンセの川辺市子は2年前に事故で死んで。Facebookの彼女のページには、彼女が死んだことを知らん人達からの誕生日のお祝いコメントが溢れてて、それに「今年もよろしくね」って返事が書かれてたのを見て、もしかしたら市子はまだ生きてるんかもしれんって思って、消せずに残ってた彼女の電話番号に、つい電話をしてしまった」

さつき「それが、いっちゃんに偶然繋がった？」

長谷川「うん」

北「うそやろ？」

長谷川「嘘ちやう」

北「どう考えたってそんな偶然ないって」

宗介「電話会社調べたら嘘かほんまかすぐ分かるわ」

長谷川「嘘ちやいます」

キキ「それからの市子ちゃんは笑ってましたか？」

長谷川「笑ってたで」

宗介「あんたはその死んだ川辺市子を被せてたんやないんか？」

長谷川「わからん」

梢「最悪」

長谷川「本気で好きになった人が結婚直前に死んでもうて、僕はどう生きていったらええかわからんかった。仕事もやめてもうて、自暴自棄になりそうやった。毎日どっかでまだ生きてるんやないかって思った

くて。そんな時に市子に電話が繋がった」  
梢「そんなん言い訳やん」  
長谷川「そやな」  
梢「酷いなあんだ」  
宗介「梢、もうええやろ」  
北「良くないやろ」  
梢「可哀想すぎるって」  
北「幸せやったんか？」  
長谷川「うん」  
北「ほんまか？」  
長谷川「うん」  
北「川辺もか？」  
長谷川「うん」  
北「…そう思いたいんちゃうんか」  
さつき「幸せなんやったら、なんで失踪したん？」  
長谷川「…」  
後藤「たぶん、川辺月子の遺体が見つかったことが原因ちゃうかと思ってる」  
さつき「妹の月子ちゃん」

映像 2015年 8月 市子28歳 月子死亡

後藤「2015年7月7日。生駒山の山中で白骨化した遺体が発見された」

梢「先月やってたニュースや」

後藤「その遺体が、川辺月子と断定された」

北「え」

後藤「死亡推定時期は2008年頃。始めは殺人事件の対象で捜査がされたが、調べていくうちに奇妙な事実が浮かび上がってきた。この遺体は、健常者の骨格ではなく、筋ジストロフィー患者に見られる形状をしていた。川辺月子のことを調べて行くうちに、彼女は普通に学校に通っていたことが分かった。そんなことはまずあり得ん。やとしたら、この川辺月子という遺体は何者で、その学校に通っていた川辺月子は一体誰なのか。居るはずのない人間の姿が浮かび上がってきた」

さつき「それが、川辺市子」

後藤「ということになるな」

梢「ちよっと待って、何で妹が山に埋められてるん？」

後藤「川辺月子の死亡届は、出されてへんかった。この死んでからの7年間、川辺月子は生きていたことになる」

梢「え？ごめん、よくわからん」

後藤「死亡したら困る理由があったとしか思えへん。それが」

宗介「戸籍の偽り」

後藤「やろうね」

宗介「そういうことか…」

後藤「川辺月子が病気の進行で心不全を起こし死んだのか、殺されたのか、それすらわからんが、川辺月子はその遺体が見つかったニュースを見たんじゃないかと想像出来る」

さつき「それで失踪したんやとしたら、殺したのは」

後藤「断定はできんけど、その可能性がある」

北「二人殺してる…」

後藤「小泉殺しが本当に川辺市子なら、妹殺しが想像通りならやけどな」

梢「嘘やろ」

後藤「（北に）君の証言は怪しいところが沢山ある。まだ、川辺市子殺しの可能性も残っている」

北「だから、嘘ちゃうって」

後藤「証言が弱すぎる」

梢「あの、ちよっと疑問なんですけど、そもそも何で市子は無戸籍なん？」

宗介「民法772条が問題やろ」

梢「何それ？」

宗介「前の夫と離婚が成立した日から300日以内に違う男との子供を出産した場合、その子供は前の夫の

子供と認知される」

梢「何であんなそんなん知ってるん？」

宗介「大学法学部やったからな」

さつき「でもそれが何であかんの？」

宗介「よくある話はDとかで前の夫と関係を取りたくないかららしいけど」

後藤「川辺市子の母、川辺なつみには離婚歴があった」

北「まじで」

さつき「話が上手く繋がりがりすぎてへん？」

後藤「まあ一つの予測でしかない」

梢「おかんに話聞いたらすぐ分かるやん？」

北「やけど、そのおかんが行方不明やねん」

梢「いつから？」

北「あの事件の後、何回か川辺に会いに家にいったんやけど一回会ったきりもう家におらんようになった」

後藤「2008年の暮れから行方が分かってへん」

梢「なんでおかんもいなくならなあかんの？」

キキ「じゃあ、市子ちゃんのほんまのお父さんは？」

後藤「川辺市子の父と思われた男は3年前に病死してる」

北「まじで」

梢「ごめんごめんごめん、もう頭パニック」

さつき「戸籍って一生取れへんもんなん？」

宗介「取れる」

さつき「ほんなら何で取らんかったん？」

北「だから人殺してもうたからやろ」

さつき「そうやなくて、人殺す前にやん」

宗介「もう名前変えてしまってるから…いや、ちやうか」

後藤「川辺なつみに何かわけがあったんやろ」

梢「おかんがいなくなった理由…って何？」

少しの間。

宗介「色々、想像できてまうな」

さつき「何がほんまなんやろ？何もわからんくなってきた」

キキ「想像せんでもうちら知ってるやん。市子ちゃんと会ってたやろ？」

宗介「でもそれは一部や」

後藤「それに君等の主観やから個人差もあるやろな」

さつき「…確かにうちあんま覚えてへん。なんか、良く考えたら自分の知ってることって全部作り話な気がしてきた。なあ、ほんまに居たんかな？そんな子」

北「は？」

さつき「てか、そもそも何でこんな話せなあかんの？」

キキ「え？」

さつき「うち、ただ知ってること話してって言われただけやし、別にあの子とずっと関わってへんし」

梢「捕まえたげなあかんってさつき言ってたやん」

さつき「でもそれうちの仕事ちやうやん」

梢「そうやけど」

少しの間。

さつき「なんかややこしい事に巻き込まれるの嫌やわ」

キキ「なんでそんな悲しいこと言うん？幼なじみなんやろ？」

さつき「だってそもそも嫌いやったし、何年も思い出したりしてへんかったもん」

キキ「よくそんなこと言えるな、行方不明になっただけで？」

さつき「知ってること話したやん。これ以上なんにも知らんし」

キキ「助けてあげたいって思わんの？市子ちゃんのこと想像してあげてや」

さつき「そういうのむかつく。自己満足やで？ボランティア行っただけで言っただけ？社会貢献してる自分が気持ちいいんやろ？人のためとか、うち、そういうの一番嫌いやし信用ならん」

キキ「……」

北「ちよつと分かるけど言い過ぎやろ」  
さつき「こう見えてあんたより年上ですけど？」  
北「なあ、こいつムカつくんやけど！」  
長谷川「もう帰ってください」

長谷川に視線が集まる

長谷川「ええから帰ってください」  
さつき「言われんでも帰ります。善人ぶって気持ち悪い」

さつきが劇場から出て行く  
少し間

キキ「どうしたら市子ちゃんは普通に暮らせるようになるんですか？」

後藤「戸籍の問題は他人がどうしようもできん。本人の問題や」

北「やっぱあんとき警察行くべきやってん川辺」

梢「そっか」

北「何で逃げてん」

後藤「逃げたんはお前もやる？」

北「……」

後藤「気持ちわかるんちゃうんか？」

北「……わからんわそんなん」

宗介「（泣いている）」

梢「宗介、泣いてんの？」

宗介「俺ほんま市子が一番しんどい時に何も気づいてやらんで…二股して市子の体ばっか見て、それやのにあいつ明るかった。よう笑ってた。なんであんな顔できたんやろ。市子が怒るとこ見たことなかった。わがままも言わんかった。俺今更やし、何にもしてやれんし…あいつと出会った意味あったんやろかって思ってる…」

梢「全部あんたが悪いなそれ」

間

宗介「市子のことそつとしいてやりませんか？」

後藤「無理や。重要参考人やからな」

宗介「俺は、もうこれ以上何も知りたくないです」

後藤「それは君の自由や」

宗介「…そうですね」

暫くして立ち上がり、劇場を出て行く宗介。

梢「ちよつと、宗介」

宗介、立ち止まらず出て行く

後藤「君等ももうええよ。ありがとう」

梢、周りを気にして出て行く

梢「あの、頑張ってください」

北、その後出て行く

後藤「君はほんまに川辺市子を殺してへんのか？」

北「殺すわけないやろ。本気で惚れててんぞ」

後藤「ネタが出てこんかったらええな」

北「んなもんじゃないわ」



北、出ていく  
キキが動かずに座っている  
長谷川も動かない

後藤「君らは？」

キキ「うちに出来る事ないんですか？」

後藤「どうやるな…」

キキ「市子ちゃんのこと、探してもいいですか？」

後藤「見つけてくれたらありがたいわ」

キキ「うち探してみます」

キキ、立ち上がったって

後藤「でも」

キキ「？」

後藤「もう死んでるかもしれん」

キキ「そうですね」

キキ、劇場を出て行く

後藤「君は探さんのか？」

長谷川「探しません」

後藤「そうか」

後藤が劇場を出て行くこうとするが、

長谷川「あの…後藤さんが知ってる市子のこと全部教えてください」

後藤「知ってることはもうない」

長谷川「お願いします」

後藤「あとは、予測しかできん」

長谷川「それでもええから教えてください」

後藤「知る事が彼女のためでもないで」

長谷川「市子は僕に必要なんです。やからちゃんと知って戻ってくるの待ってやりたいから。お願いします」

後藤「…わかった」

## 6 後藤の推測

映像 2008年 8月 市子21歳 月子18歳

後藤「まだ情報が少ないから全ての推測はできひんけど、一つ話せるなら殺された小泉と川辺なつみ、川辺市子、川辺月子との関係や」

市子、なつみ、小泉が出てくる

後藤「小泉の職業はソーシャルワーカーで、川辺月子の障害の状況を診に川辺家に訪れるようになった。川辺なつみの証言が正しいんなら、スナックにも入り浸ってたってことやし、おそらく小泉は川辺なつみに没頭してたんやと思う。そうやな？」

小泉「そうです」

後藤「で、川辺なつみと小泉は体の関係は？」

なつみ「ありました」

後藤「どれくらい？」

小泉「しょっちゅうです」

後藤「市子はそれを知ってたんか？」

市子「知ってました」

後藤「で、川辺月子の容態やけど、死亡推定時期の2008年は自然死するレベルやったんか？」

小泉「人工呼吸器は必要やったけど、まだまだ生きれそうでした」

後藤「ということは、何で死んだ？」

小泉「たぶん、殺されたんやと」

後藤「殺された？」

小泉「わかりません」

後藤「川辺月子が死んで得する人間は？」

小泉「介護疲れのなつみさんかと思えます」

後藤「あんたが殺したんか？」

なつみ「……」

後藤「（小泉に）あんたは川辺月子が死んだ事はいつ知ったんや？」

小泉「すぐ知りました」

後藤「どうやって？」

小泉「なつみさんに聞きました」

後藤「なんて？」

なつみ「月子が発作で死んでしもた」

後藤「遺体は見たんか？」

小泉「……」

後藤「市子は見たんか？」

市子「……」

後藤「川辺なつみは、川辺月子の死に相当焦ったんやと思う。幼い時に、市子を月子として生かすことにしたんやから、川辺月子が死んだ場合、川辺市子の死亡届が出てしまう事になる。そうになると、川辺市子はまた無戸籍に戻る事になり、更に名前と年齢を偽ったことが世間にばれ、ややこしくなる。だから」

小泉「川辺月子が生きてると嘘と一緒にいってくれないかと頼まれました」

後藤「それはあんたにとって何のメリットがあった？」

小泉「ただ、なつみさんの力になりました」

後藤「したら川辺市子を強姦したのはなんでや？」

小泉「……」

後藤「（市子に）強姦されたんか？」

市子「……」

後藤「川辺月子は殺されたと考えた方が可能性が高い。その遺体を生駒山に運んで埋めたんやしたら、川辺市子一人では無理や。たぶん、三人で埋めた可能性が高い。川辺なつみには免許が無かった。恐らく小泉の車で遺体を運んだんやと思う。違うか？」

小泉「……」

なつみ「……」

市子「……」

後藤「3人が裏切らなかつたとしても、川辺月子が居ないということがばれるのは時間の問題やったと思う。でも、小泉を殺すことは余計に状況が悪化するだけでしかなかったはずや。やのに、あんまり時間を空けずに小泉は殺されている。北の証言が本当なら、川辺市子によって刺され、遺体を線路に寝かせ人身事故に見立てた。これには疑問点が多々ある。ただ小泉が自殺をする要素は見つからん。となると、この夕イミングで失踪した川辺市子となつみどちらかが容疑者であることは間違いないと思う」

後藤の話の最中に、小泉は居なくなっている

後藤「さて、となると、川辺月子が死んだことが小泉殺しへの引き金になってるのは分かるが、川辺月子を殺す動機が見つからん。川辺なつみは介護疲れがあったとしても、市子の戸籍のことを考えたら恐らく違うやろうし、川辺市子も自分が無戸籍やということを知ってるんやとしたら」

市子「でも、もし」  
後藤「無戸籍ということ知らなかったら」  
市子「でも、もし」  
後藤「川辺月子の人生を生かされていると感じてたら」  
市子「でも、もし」  
後藤「元々、川辺市子の人格に支障があったとしたら」  
市子「でも、もし」  
後藤「川辺月子を殺したんかもしれん」

後藤と長谷川が椅子に座っている  
クマゼミの鳴き声が響いてくる

映像 2008年 8月27日 市子21歳 月子18歳

市子「あの日、8月27日はうちの誕生日で、やけど世の中ではうちの誕生日やなくて、夏休みやから家で  
月子のこと見守ってた。月子は今年に入ってから、人工呼吸器をつけなあんくなってしもて、うちかお  
母さんが必ず家におらなあんようになってしもて、今日は暑くて、蝉はほんまにうるさかった」

市子が月子を見つめている

市子「月子とは、もうだいたいぶ前から話もしてへんくて、何を考えてんのか、いつつもうちの顔ばっか見てた。  
その目が、睨んでるみたいに見えて、うちは、何にも悪くないのに、月子が苦手になっていった。そやけ  
ど、この日は、月子の目がうちに何かお願いしてるみたいで、うちは、それが何か分からなくて、ただそ  
の日は暑すぎたから、月子の人工呼吸器に手を伸ばした。月子はうちの目をじっと見て。うちは、そのま  
ま呼吸器を外してしもて、じっと、月子の命が、落ちて行くのを、見てた。音もなく、動きもなく、月子  
は静かに死んでいった。それからしばらく、ポーツと月子を見つめて、部屋を出て、リビングでアイス  
食べた。甘かった。外は夕方になってヒグラシが鳴き出して、お母さんが帰ってきた」

なつみ「市子」

市子「うちは、お母さんが嫌いや。このとき、お母さんはうちに」

なつみ「ありがとうな」

市子「つて言った。どういう意味かわからなかった」

なつみ「元気？お母さんは何とか頑張って生きてるよ」

市子「お母さん、うち月子のことも嫌いやったんかな？」

なつみ「急に市子がおらんくなって、今もどこにおるかわからんけど、お母さんね」

市子「お母さん、うち頭おかしいんかな？」

なつみ「生きてたらええことあるって思ってるんよ、何があっても」

市子「お母さん、うちこれからどうしたらええの？」

なつみ「産まれてきてくれてありがとうな」

市子「お母さん、また手繋いで歩きたいよ」

なつみ「市子に会えるときのことばっか考えてる」

市子「お母さん、毎日怖くて泣きたくて」

なつみ「何をしてやれるんやろうって」

市子「お母さん」

なつみ「してやれることないかもしれんけど」

市子「お母さん」

なつみ「市子に会えたら」

市子「お母さん」

なつみ「許されるなら」

市子「お母さん」

なつみ「抱きしめたい」  
市子「お母さん」  
なつみ「許されるなら」  
市子「うん」  
なつみ「抱きしめたいんよ」  
市子「うん」  
なつみ「許されんけど」  
市子「うん」  
なつみ「あの日みたいに」  
市子「うちは」  
なつみ「抱きしめさせてな」  
市子「お母さんと」  
なつみ「さよならやで」  
市子「また会えるって」  
なつみ「さよならやで」  
市子「信じてるから」

なつみが居なくなる  
気づくと、後藤も居ない  
長谷川と市子だけがいる  
市子の電話が鳴る

## 7 再会

慌てて長谷川が電話を耳に当てる

市子「もしもし」  
長谷川「……」  
市子「もしもし」  
長谷川「え、あ、すいません」  
市子「もしもし」  
長谷川「あ」  
市子「……はい」  
長谷川「すいません、長谷川です」  
市子「……どの長谷川さんですか？」  
長谷川「川辺……さんじゃないですよね？」  
市子「……川辺ですが」  
長谷川「え」  
市子「え」  
長谷川「え」  
市子「……あのう」  
長谷川「川辺市子……さんですか？」  
市子「……そうですけど」  
長谷川「なんで……」  
市子「……市子です」

市子と長谷川が向き合っている

市子「長谷川くん」  
長谷川「うん」  
市子「久しぶり」  
長谷川「うん」  
市子「元気？」

長谷川「うん」

市子「どうしたん？」

長谷川「なーんもないで」

市子「なーんもないか」

長谷川「（声に出して笑う）」

市子「なあ、何か変やで？」

長谷川「そやな」

市子「いつつもあんまり喋ってくれへんのやから」

長谷川「ほんまやな」

市子「たまには喋ってや」

長谷川「うん」

市子「うちばっか喋ってるやん」

長谷川「わかった」

市子「でもそういうところ好き」

長谷川「（声に出して笑う）」

市子「なあ今日なケーキ褒められた」

長谷川「ほんまか」

市子「食べてくれる？」

長谷川「食べる」

市子「美味しい？」

長谷川「美味しいで」

市子「いっつも食べてくれたの嬉しかったで」

長谷川「今度温泉いかへん？」

市子「どこ？」

長谷川「城崎」

市子「いくいく」

長谷川「楽しみやな」

市子「混浴ある？」

長谷川「ないな」

市子「えー」

長谷川「なに？」

市子「寂しいやん」

長谷川「お風呂だけやろ」

市子「だって温泉はお風呂がメインやん」

長谷川「そやな」

市子「寂しい寂しい寂しい」

長谷川「結局行けてなくてごめんな」

市子「（咳こむ）」

長谷川「熱か？」

市子「そうかも」

長谷川「病院いこう？」

市子「寝たら治るからいい」

長谷川「点滴打ったほうがええよ」

市子「病院嫌いやし」

長谷川「ほんまに大丈夫か？」

市子「仕事休んで看病してくれて嬉しかったで」

長谷川「怒ってる？」

市子「何回言ったら直るん？」

長谷川「ごめん」

市子「タオルびちよびちよの床に置かんとして」  
長谷川「ああそれ」  
市子「次したらご飯抜きやで」

長谷川「いつも作ってくれてありがとやで」

市子「どうしたん？」

長谷川「なあ、どこやったん？」

市子「え？」

長谷川「僕の『シャツ無いんやけど？』」

市子「あ、タンスの2段目」

長谷川「だから、入れるとこそちやうって」

市子「ほんなら自分でしまつといて」

長谷川「ごめん」

市子「またポケットにハンカチ入ってるやん」

長谷川「あれ？」

市子「もっかい洗濯せなあかんやろ」

長谷川「ごめん」

市子「めんどくさいんやからな」

長谷川「ちよつとドライヤーしまつてへんやん」

市子「あ」

長谷川「何回言ったら分かるん？」

市子「ごめん」

長谷川「トイレットペーパーも無くなったら変えてって」

市子「あ」

長谷川「いっつもやで」

市子「ごめん」

長谷川「頼むで」

市子「なあすぐ醤油かけんのやめてほしい」

長谷川「え？」

市子「一生懸命作ってるんやで」

長谷川「だって味薄いんやもん」

市子「一口食べてから言つてや」

長谷川「エアコンの温度」

市子「だって」

長谷川「25度にしてって言ってるやん」

市子「暑いんやもん」

長谷川「寒すぎるやん」

市子「ああ！」

長谷川「どした？」

市子「食べた後の食器、水につけてって」

長谷川「またや」

市子「ほんま自分で洗ってもらうで。カピカピとれにくいんやから」

長谷川「生ビールください」

市子「うちも！」

長谷川「もうやめときって」

市子「飲み足りへん」

長谷川「またベロベロなるで」

市子「それ長谷川くんもやる」

長谷川「そやな」

市子「そやで」

二人、笑い合う

長谷川「市子！」

市子「シチュー、ええ感じや」  
長谷川「肉、めっちゃ入れてな」  
市子「今日はそんなに肉入ってへんねん。ごめんな」  
長谷川「なんで？」  
市子「給料日前やねんから」  
長谷川「それ。便利な言葉やなあ。給料日前」  
市子「事実。苦しいの」  
長谷川「(シチューを見て)お。うまそう」  
市子「長谷川くん、小さいときは何が好きやった？」  
長谷川「肉やなあ」  
市子「もう、焼肉とかすき焼きとかあるやん」  
長谷川「牛肉やったらなんでも」  
市子「男の人ってそういうところある」  
長谷川「市子は？」  
市子「うちは、味噌汁かな」  
長谷川「え」  
市子「変？」  
長谷川「嫌いな人おらんとは思うけど」  
市子「夕方になつたら匂いするやん」  
長谷川「ああ」  
市子「どこかの家の」  
長谷川「する」  
市子「幸せそうな匂い」  
長谷川「ははは」  
市子「憧れの匂い」  
長谷川「：うん」  
市子「(シチューを食べる)」  
長谷川「(シチューを食べる)」  
市子「(笑って)やから」  
長谷川「やから？」  
市子「うち、今幸せなんよ」  
長谷川「・・・」  
市子「・・・」  
長谷川「うまかったで。このシチュー」

市子と長谷川が向かいあって座っている

### 長谷川の言葉

なあ  
何があつたとか  
ほんまのことは  
知ること  
知りたいとも  
そんなこと  
知ったかぶりとかできひんし  
でも知りたいわけちゃう  
一緒にいた時間が  
ただ確かな僕の気持ちやから  
どこにもいかんでええのに  
ここに居てくれたらええのに  
あん時

気づけんくてごめんな  
笑ったことの意味  
勘違いしてごめんな  
市子の笑った顔が好きや  
食べるとき大きく口開けるんが好きや  
味噌汁作る背中が好きや  
テレビを見るときにくつついてくるところも  
お風呂一緒に入りたがるところも  
眠いのと一緒に寝るって頑張るって起きてるところも  
暑いのが苦手なところも  
ほんまに  
ほんまに  
市子でも  
月子でも  
そんなこと関係なく  
君が好きやで  
なあ  
結婚しよう  
一緒になろう  
そんな言葉  
すぐドブに捨てるから  
自分が今感じてるんは  
喉が裂けても  
足がもけても  
目が潰れても  
君やから  
欲しいのは  
君との穏やかな時間やから  
なあ  
一緒に歳とって  
一緒に失敗して  
一緒に成長して  
苦労して  
またシワが増える  
どんどん増えるシワを数えるんが  
楽しみやなあ  
今日も暑くなりそやなあ  
大丈夫や  
大丈夫やからな  
きつと  
必ずなあ：

長谷川が市子に手を差し伸べる。  
市子が手を掴もうとした瞬間暗転。  
溶明すると、そこに長谷川の姿は無い

### 市子の言葉

小さい頃に一緒に遊んだあの子が



うちのことを忘れるみたい  
うちも色んな事忘れるやろって  
町には人が溢れてて

その中で笑ってる人達は  
何がおかしくて笑ってるんやろ

それってうちの存在が可笑しかったから笑ってたんかもしれん  
自分で自分のことが

好きとか嫌いとか  
そんな問題より

うちが誰なんか教えてくれる人がいなくて  
なあ、長谷川くん

うちは、初めて人と一緒にいることが  
こんなに幸せなんやって思えたよ  
家に帰る途中で

今日一緒に食べるご飯のこと考えて  
スーパーに行って買い物して

帰りの遅い長谷川君のために  
ご飯作って待ってて

今から帰るっていつもメールくれるんが嬉しくて  
たまに買って帰ってきてくれるモロゾフのプリンが美味しかったり

洗い物サボってテレビ見て笑って  
たまにお風呂も一緒に

軽くお酒飲んで眠たくなったら一つの蒲団に潜り込んで  
そこには長谷川くんの匂いがあった

朝起きたときに寝顔があるのを見て安心する  
そういうことを「好き」って言うんやとしたら

うちはちゃんと人の事を好きでいたんかな？  
普通の生活が

穏やかな暮らしがただただ欲しいだけで  
それを叶えたらあかんこととしてしまったのは

わかってるし  
月子の呼吸器を外したときの

あの目を

うちは忘れられへん  
やから、

ちゃんと今一人で  
これからも一人で

うちはな：

水の音がする  
川のせせらぎの

穏やかな音がする  
空には

おっきな月が出ていて  
今日がまた終わりを告げるんを

教えてくれる  
暑い日は、蝉がうるさいほど

エネルギーを出すから  
うちも、人間も

誰だって、同じように  
叫びたくなる

だから  
どこにいても

もう居場所はないかもしれんけど  
迷惑な人間やけど

惨めでも、汚くても  
昨日と、明日は繋がってて  
その遠い遠い先に  
うちはちゃんと  
生きていられるのかなあ？  
夏は

どうしたって  
いっただっ  
今日だっ  
暑すぎるから  
うちは

また罪を  
犯すのかなあ？  
明日も  
暑いのかなあ？

一日が終わって  
夕日が沈んでも  
リセットを押されるわけじゃなくて  
また明日はやってくる  
このまま夜を過ごせたら楽やのに  
どうしたって明日はやってきてしまう  
それでも

うちは  
生きていたい  
生きていたい  
生きていたい  
生きることをやめられへん  
やめたくても  
やめられへん  
だから  
何度でも何度でも  
きつと、明日も：

静かに溶暗  
市子の最後の言葉の先には生命力が溢れている  
再びクマゼミの鳴き声が劇場を満たしていく

終わり